


【会議報告】



会議報告

◆ウェアラブルシンポジウム2010

白須英治

(東京大学工学部 廣瀬研究室)

(NewsLetter Vol.3, No.11)

10月14日、新宿にある文化学園ホールで、朝日新聞社主催、学校法人文化学園共催による「ウェアラブルシンポジウム2010」が開かれた。このシンポジウムは、ウェアラブルコンピュータによる衣服の機能拡張、自己表現の拡張の可能性を示し、ウェアラブルコンピュータが社会に与える影響を考えるものである。

シンポジウムはMITメディアラボのジュディス・ダナスによる基調講演で始まった。この講演では、自己表現の拡張を中心にアメリカで研究されてきた種々のウェアラブルコンピュータが紹介された。引き続き行われたテクニカル・セッションでは、日本国内のウェアラブルコンピュータやヒューマンインタフェースの開発者が出演した。製品化されたウェアラブルコンピュータとして、IBMのウェアラブルPCの試作機、セイコーインスツルメンツのRuputer、ザイブナー社のモバイルアシスタントについての説明が行われた。

NTT 移動通信網マルチメディア研究所の福本雅朗研究主任は、常装着型インタフェース(ful-time wearable interface)と題し、ネットワークへの常時接続が当然のこととなった際、携帯する端末にはヒューマンインタフェースと通信機能さえあればよいことから、携帯性と操作性のトレードオフの中で、小さくても使いやすいインタフェースを考える必要があることを強調した。具体例としては、各指に加速度センサを付けたFingeRingの実演を行った。

また、東京大学の廣瀬通孝助教授は、ウェアラブルコンピュータの持つ、VRに代わる究極のヒューマンインタフェース、超分散システムとしての可能性を示唆し、地理情報の活用、通信機能の導入など今後の課題について語った。その後のディスカッションでも、ウェアラブルコン

ピュータの問題点が討議され、コンピュータの発熱の問題、バッテリーの小型化の問題、プライバシーの保護の問題などが挙げられた。

午後には文化服装学院による、日本国内では初めてのウェアラブルコンピュータのファッションショーが行われた。ファッションショーは2部に分けて行われ、第1部では、昨年MITのシンポジウムで発表された作品、第2部では初公開となる最新作が発表された。これらの作品には、ウェアラブルコンピュータが実装されているわけではないが、2010年に実現可能と予測される多彩な機能が想定されていた。調理師・警官といった特定の職業における人間の能力拡張と、ヒーリングのような精神的な面の機能補助を扱った作品が目立った。

引き続き行われたパネルディスカッションには、高城剛、椎名亜希子、柏木博、手塚眞、津村耕佑の各氏が参加し、「もう一つの皮膚」であるウェアラブルコンピュータの出現により生じる新しい身体感覚の登場、身体そのもののメディア化による、主観と客観の境界の消滅など中心に議論が進んだ。デザインとはオーラのようなものであり、着る人の持ち味が自然に現れるのだから、本来身体的な表情(例えば顔が赤くなるとか)に現れる情感を、機械で現すことで情感のデザインの具現化が可能になる快感があるという意見、今は奇抜に見えるウェアラブルコンピュータが社会的に受け入れられるには、素材が変わる(繊維が変わって衣服にコンピュータが実装できるようになる)・社会が変わる(見る目が変わる)・機械が変わる(十分に小型化して目立たなくなる)などの要素が必要だという意見が目立った。

このシンポジウムが来場者に大きなインパクトを残すものであったことは間違いなく、ウェアラブルコンピュータを取り巻く環境の今後の動向が注目される。